

小学生の部 最優秀賞

「焼津にて」と精霊流し・とうろん

焼津市立和田小学校 六年 渋谷柚奈

去年の七月十六日、私は、焼津駅前を流れる小石川の精霊流しを見に行きました。小泉八雲の「焼津にて」の第二章にお盆の三日間、八雲が焼津について、精霊流しを見たことが書いてあったからです。

お盆の三日目の明けの日のあの美しいお別れの儀式を、ぜひ見ておきたいと、八雲は「焼津にて」で書いています。私も八雲と同じようにお盆の送り火を見てみたいなと思いましたが。二千年の現代では、小石川にかかる橋の上で行っているけど、千八百九十七年、今より百十二年前は、八雲が泳いだ今の新焼津漁港辺りの浜で行われていました。

小石川は、私が小さい時コイを見に行った川です。その時は、人や自動車がいそがしく通り過ぎ、時々散歩がてらコイ

にえさをやっている人もいました。でも、その夜は様子がちがいました。小石川の橋の両側には、人がかき分けないと通れないほどもいました。けれども、あんなに人があふれていたのに、しいんとしてさみしい感じがしました。

八雲が見たのと同じとうろうが、売られていました。テントの所でみんなならんで、死んだ人のかい名をおぼうさんに書いてもらっていました。千八百九十七年、八雲が初めて焼津に来た時、八雲はうっかりね過ごしてこのせがき供養を見ていません。その時のくやしい思いが千八百九十九年に来た時に浜でのせがき供養を見学して、「海のほとり」という作品になったと思います。

私が百十二年前に行ければ、

「八雲さん起きて、起きて。」

と起こしてあげるのですが、それはむりです。だから、この感想文の中で、八雲さんに教えてあげようと思います。では、書きます。

お経が聞こえました。手にお花の絵の書いてあるむらさき色や赤色の精霊を持った人達が大勢いました。それを小石川流していました。川を流れる精霊は、水面に写ってとてもきれいでした。でも、どの人も静かに流れるとうろうについて歩いていました。はしゃいだ声を出してはいけない雰囲気でした。川の流れにそって流れて行く様子は、人が立てひざをしてすうっとすべっているように感じました。それを流した家族がずっと後を追って無事、海まで流れるように見守って

いました。先祖を思う気持ちにじんときまりました。

夜の十時に目をさました八雲が、きれいな精霊を追いかけ
沖へ泳いで行った気持ちに私には、わかる気がします。美しい精霊に、

「おいで、おいで。」

と呼ばれてついて行ったのではないのでしょうか。でも、それ
だけではありません。八雲は、自分が本当は八時に起きてと
うろうろ達を見送ってあげたかったのではないのでしょうか。で
も、それができませんでした。だからせめて、沖まで行って
見送れなかった分を取りもどしたいと思つたのでしょうか。

「焼津にて」ではとうろう達は、生きて人生に苦しんでいる
人間達だと書いてありました。でも、私は、とうろう達が、

家族や八雲に見送ってもらってとても幸せな気持ちで沖へ帰っていったような気がします。

焼津は、昔から漁業がさかんです。小舟で出港した漁師達が、伊豆諸島や小笠原諸島までカツオを追いかけて、漁をしました。けれども、焼津を水産都市にしたかげにはどれだけ多くのぎせいがあったでしょうか。浜当目のマリアナ観音は昔、マリアナ海きようでちんぼつした焼津の漁船の漁船員七十二人のたましいを供養しています。台風やあらしで船がしずみ、ぎせいになった焼津の人々、台風のせいではないけれど、第五福竜丸も同じだと思えます。八雲も感動した精霊流しは、明治時代までに焼津の発展に命をささげた焼津の人々のたましい達がとうろうに乗ってじつと八雲を見ていて、そ

の気持ちが一雲に伝わるおごそかな行事だったのでしよう。

「焼津にて」で小さな入江と書かれた焼津港の辺りから海岸を下ると、昔、和田小学区だった石津があります。私は、今年の八月十六日、田尻北浜でとうろんというお盆の行事を見学しました。浜には、両はしに大きなとうろんが二つ、真ん中には小さなとうろんが二つ立っていました。暗くなると、子供達がひもの先についているボールの様な物に火を付けてぐるぐる回して、とうろんに投げ入れました。だんだんとうろん全体に火が回り、火の粉がぼうつとまいました。お経も聞こえました。海の事故で亡くなった人やご先祖様、小泉八雲さんのたましいが、あの火の粉といっしょに天に帰っていくんだなあと思いました。

「八雲さん、あんまり沖の方に行くとかあなたのお父さんとお母さんにつれて行かれてしまいますよ。」

乙吉さんのように私も八雲に語りたいです。